反芻

作　松井のどか

■登場人物

虫眼鏡…占い師。地球調査隊隊長。大きな虫眼鏡を持っている。

電話番…　占い師の助手。地球調査隊隊員。電話のような機械を持っている。

白蛇　…　占い師の助手。地球調査隊副隊長。白蛇を模したものを首に巻いている。

水晶　…　地球調査隊隊員。大きな水晶を身に着けている。

女　　…　占いの客。みわ。男の恋人

男　　…　占いの客。けんちゃん。女の恋人

■設定など

舞台にはハンガーラックと机、いくつかの椅子。ハンガーラックには衣装などがかけてある。

女は過去と現在をいったりきたりする。

「電話」は、現在のシーンではスマートフォン、過去のシーンではガラケーか固定電話を想定。

■導入

エプロンをした女が散らかった部屋で日記を書いている。

ふと気が付いて、部屋を片付け始める。散らかったゴミを次々とゴミ袋に入れていく。全て入れ終わるとエプロンをハンガーラックにかけ、ゴミ袋と日記帳を持って出ていこうとする。入れかわりに男が出てくる。

男　今日ゴミの日だっけ。

女　そうだよ。燃えるゴミも燃えないゴミも資源ごみも全部出せる日。

男　そんな日あったっけ。今日土曜日だよね？

女　…。

男　みわ？

女　ん？ああ、ごめん。出してくる。

男　…ありがとう。

女がごみ袋と日記帳を持って出ていく。

男はちゃぶ台を拭き始める。女が戻ってくる。

女　なんかめっちゃカラスいた。朝ごはんどうする？

男　トースト焼こうか。

女　ありがとう。コーヒー淹れるね。

男　ねえ今思ったこと言ってもいい？

女　どうぞ。

男　こうやって朝ごはん一緒に準備しようとかって話してんの、めちゃくちゃ幸せ。

女　そう？

男　そう。

女　別に大したことないじゃん。

男　普通がいいんだよ。俺にとっちゃ夢みたいなのよ。

女　ふーん。

男　塩対応すぎない？

女　普通…。

男　どうしたの。

女　なんでもない。けんちゃんいつも大袈裟だからなー。

男　だからさ…この前のあの話、ちゃんと考えて欲しい。

女　…。

男　みわが何にひっかかってるのかわからないけど。

女　…。

男　年齢のことなら、お互い気にしないって前にも話したよね。

女　…その話は、またあとで。お湯沸かしてくる。

女、出ていく。男も続く。

■占い師たち

虫眼鏡、白蛇、電話番、水晶が出てくる。虫眼鏡は虫眼鏡とメモを持っている。電話番は電話を持ち、白蛇は白い蛇の張りぼてを首に巻いている。水晶は大きな水晶玉を持っているか、身につけている。

ハンガーラックから紫の布をとり、椅子のひとつにかける。占いブースっぽい感じ。

白蛇と虫眼鏡が客席に向かって座る。

電話番は立っている。

水晶は離れて水晶占いを始める。

虫眼鏡が誰かの占いをはじめる。

虫眼鏡　（虫眼鏡で客席を覗きこんで）うーむ。

虫眼鏡、手元の紙に数字の羅列をメモする。

白蛇　白蛇さまが、何か仰っている。少々お待ちを。

白蛇、虫眼鏡が書いたメモを電話番に渡す。

電話番　（メモを受け取って、電話をかける）あ、もしもし？はい、えーっと、339、585、6627、49、です。（頷きながらメモを取り）うんうん。…あざーっす！

電話番、電話を切り、白蛇にメモを渡す。

虫眼鏡　お待たせしました。ええ…見たところあなた、ずいぶん難しい選択を迫られているようだ。なるほど、今の仕事を続けていていいのか、ということですな。白蛇さま、いかがでしょう。

白蛇　（メモを見ながら）あなたが今朝食べたカツオのタタキには、アニサキスはいませんでした。

虫眼鏡　え？

白蛇　良かったですね。

虫眼鏡　あ、いえなんでもありません。忘れてください。すみません、白蛇さまはご冗談がお好きなところがあって…いえ、もう少しお待ちを…え、カツオのタタキなんて食べてない？そうですか…。あ…いえ、また、お越しください…。あー

あ、帰っちゃったよ。白蛇、お前なんであのタイミングでアニサキスなんだよ。

白蛇　だって、書いてあったから。

虫眼鏡　電話番！

電話番　だって、電話口でそう言われたんすよ。

虫眼鏡　おかしいな。番号読み間違えたかな。

白蛇　それか、きみが伝え間違えたか。

電話番　ひどい。私は、メモ通り言いましたよ！

虫眼鏡　しかし識別番号が違ってたとしても、朝飯の情報しかもらえないとはなあ。

電話番　仕方ないっす。深い情報は課金しないとダメなんで。

白蛇　そんなことより、電話繋がるなら助けに来てもらえないんですか。

電話番　無理です。自動応答だから。トークスクリプトから外れると、最初のアナウンスに戻っちゃうんすよ。

虫眼鏡　地球よりほんのちょっとだけ文明が進んでいることがアダとなったな。

白蛇　え、なに。二人とも、なんかもう受け入れちゃってる感じ？

電話番　戻れないんだから、とりあえずはココで生きていかないと。オカネ？ないとダメっぽいじゃないすか。

虫眼鏡　予定の調査期間も過ぎて、もう食料も尽きかけてるんだ。背に腹は代えられない。

白蛇　私は全然受け入れられない…。格好も一人だけ浮いてるし。だいたいなんですか占いって。水晶なんてはまっちゃって、あんなだし。

三人、水晶を見る。水晶は占いを続けている。

水晶　見える、もう少しでなんか見える、気がする…

電話番　水晶先輩、凝り性だから。

虫眼鏡　地球調査船が、なぜ我々と荷物をおろした途端に帰還してしまったのか、原因は定かではない。しかし、無人の調査船が星へ戻ればさすがに救助がくるだろう。それまでの辛抱だ。

白蛇　電話は繋がるっていうのがなあ。

電話番　繋がるって言っても、地球人の過去データ問い合わせ用番号だけですよ。調査中、私たちみたいな調査員が地球に溶け込むために集めてるデータを、地球人の目ん玉の真ん中のここんところに書いてある個体識別番号を伝えると教え

てくれるんすけど、それだけ。

白蛇　一般人の朝食メニューのデータは要らないんじゃないか。

電話番　情報にも優劣があるんすよ。地球調査って言っても私たち、結局民間じゃないすか。会社が金出してくれないと、もらえるデータも薄っぺらくなっちゃうんすね。電話してみてわかったけど、うちの会社、地球人データの照会に関しては一番下のプランですね。

白蛇　はあ。ため息しか出ない。

虫眼鏡　帰ったら、そこの予算を増やしてもらうよう交渉するよ。

白蛇　帰れたら、ですけどね。

虫眼鏡　とにかく、我々は今あるものでどうにか今日を生きていかねばならない。過去データに繋がる電話と、荷物に紛れていたヘビのハリボテだ。

白蛇　なんでヘビのハリボテがあるんだ。

水晶は占いを続けている。

電話番　あと水晶玉。

水晶　見える、見えるわよ…。

白蛇　水晶、もう終わりだ。お客さん帰ってる。

水晶　うそ。これからだったのに。ね、なんか私、本当に見えるようになったかも！

白蛇　（電話番に）あの玉は、本当にそういった効果があるのか。

電話番　いや…

水晶　すごくない？私独自のチカラが目覚めちゃったんじゃない？

白蛇　…隊長、なんでアイツは今回のメンバーに選ばれたんですか。

虫眼鏡　…大人の事情だ。

水晶　私ちょっと自主練するから。話しかけないで。

水晶は再び占いをはじめる。

電話番　水晶センパイのことは一旦置いておくとして、我らが隊長が思いついた名案が、占いで稼ぐ！なんですから。白蛇さまも納得してたでしょ。

白蛇　その呼び方やめてくれ。代案が浮かばなかっただけだ。

虫眼鏡　地球人、特に日本人の占い文化についての文献を読んだことがあるんだ。タイトルは確か「漫画でわかる！稼ぐ占い師独立マニュアル」。文献によると、まず過去の出来事を当ててみせて、次に未来の話をする。正直、いけると思う。

電話番　いけるかどうかはおいておくとしても、確かにお客さんは来たっす。

白蛇　怒って帰ったけどな。

電話番　そこはまあ、慣れですよ。

虫眼鏡　そこはまあ、慣れだ。

電話番　そうだ、メモなんかしないで、デカい声で番号伝えてくださいよ。そのまんま言うんで。

虫眼鏡　わかった。次はそれでやってみよう。

白蛇　それだと私の仕事なくなりませんか。

虫眼鏡　いいんだ。下手に仕事をしないほうがオゴソカだから。

白蛇　わかりましたよ。次があるのか疑問ですけど。

男が出てくる。

男　あの。

白蛇　へ？

男　占い、やってもらえますか。

電話番　ほら来た。

虫眼鏡・水晶　もちろんです。どうぞお座りください。

男、座る。

電話番　水晶センパイはあっちでやってください。

水晶　えー。ひどーい。

電話番、水晶を離れた場所に座らせる。

虫眼鏡　では早速。あ、前払い制なんですがよろしいですか。

男　はあ。おいくらですか。

虫眼鏡　相談一つにつき、五十円です。

男　五十円。

電話番　（小声で）隊長、違う！五千円！

虫眼鏡　五千円です。すみませんね。ちょっとエンの感覚がなくて。

男　外国の方にしては言葉が流暢ですね…。じゃあとりあえず、五千円。

電話番　ありがとうございまーす。

電話番、お金を受け取って離れる。

虫眼鏡　では、あらためて。（虫眼鏡で男の目を覗き込む）875.2663.523°

電話番が電話をかけ、メモをとりはじめる。

水晶も占いを始める。

男　なんですか急に。

白蛇　お静かに。

男　すみません。

虫眼鏡　乗ってきたね。

白蛇　お静かに。

男　あの、相談聞いていただけるんですよね。

電話番　その前に、あなたの過去を。

男　過去。

虫眼鏡　そうです。

虫眼鏡・水晶　我々の占いの信憑性を高めるために、あなたの過去を的中させましょう。

男　過去って、子どもの頃のこととかですか。

虫眼鏡　まあ、それも含まれますな。

男　いいです。

虫眼鏡　え？

男　過去は、いいです。そんなにいいことなかったし。

電話番　大丈夫です。朝食のメニューとか、せいぜいそんなもんですから。

虫眼鏡　余計なことを。

男　ああ。朝食くらいなら。

電話番　はい。（メモを虫眼鏡に手渡す）

虫眼鏡　ええと、なんだこれ。「コ…ショク」？

白蛇　朝食じゃなさそうだな。

男　もういいです。いいことなかったって言ったじゃないですか。

男、出ていく。

白蛇　また怒らせたじゃないか。

虫眼鏡　怒るようなワードだったか。

電話番　でも今度はお金はもらえたっす。

白蛇　「良心の呵責」とはこういうことを指すのか。

水晶　また私のパワーお見せする前に帰っちゃったわね。

電話番　五千円あったら、何ができるんでしょう。

虫眼鏡　さあな。買い出しでも行ってみるか。

電話番　使い方、うちのホシと同じだといいんですけど。

白蛇　同じだろ。さっきの人もコレ出しただけだった。

水晶　私は残って占いの研究に励むわ。

虫眼鏡　好きにしてくれ。

三人、出ていこうとするが、男が戻ってくる。

水晶　あら。さっきの。

白蛇　（厳かに）どうなされた。

虫眼鏡　またノッてる。

電話番　やっぱり占って欲しいとか？

虫眼鏡　余計なこと言うなって。

男　いいえ、過去を。

虫眼鏡　過去？

男　過去を、見せてほしいんです。

虫眼鏡　それはちょっと。

男　駄目、なんですか。さっきのはどうやったんですか。僕の、過去。僕以外の過去はどうですか。

電話番　見せる、ことはできないですよね。

白蛇　まあなあ。

水晶　ねぇ、データ照会してあげなさいよ。

電話番　え？ああ、いいっすけど。

電話番、電話を耳に当てる。

電話番　875.2663.523…

男、反対側から電話に耳を近づける。

虫眼鏡　なにしてる。

男　聞こえる。貸してくれ！（電話を奪う）

男、舞台の端でスマホから聞こえる音声をじっと聞いている。

虫眼鏡　どういうつもりだ。

電話番　いや水晶センパイが…

水晶　いいじゃない。お金もらってるんだし。

白蛇　あれを聞き続けることで、個体への悪影響はないのか。

水晶　過去よ過去。自分が知っているはずの。

白蛇　まあ、そうか。

水晶　なんであんなに聞き入ってるのかも、私にはわかんないわね。

虫眼鏡　とにかく、今後は突然勝手なことするなよ。ついていけなくなるから。

水晶　はいはい。

男、スマホを耳に当てじっと聞いている。

水晶は再び占いの研究をしながら出ていく。

電話番　電話、返してくれそうにないっすね。

虫眼鏡　まあいい。とりあえず放っておけ。

■女の相談

女が入ってくる。日記帳を持っている。男には気が付かない。

女　あの。

虫眼鏡　へ？

女　占い、やってもらえますか。

電話番　いらっしゃいやせー！

虫眼鏡　そういうのはやめろ。

白蛇　いかがなされた。

虫眼鏡　雰囲気だけはコイツのほうが心得てるんだよな。

電話番　ささ、どうぞこちらに。（イスをすすめる）

女　ああ、はい。（座る）

虫眼鏡　それで今日は、どのような。

電話番　隊長、オカネお金。

虫眼鏡　ああすみません。あの、前払い制となっております。相談一つにつき、五千円。

女　ああ…（お金を出す）

電話番　あざーっす！

虫眼鏡　すみませんね騒がしいやつで。ええと、それで。まずはあなたの過去を、当てみせましょう。

女　過去。

虫眼鏡　そうです。

虫眼鏡　我々の占いの信憑性を高めるために、あなたの過去を的中させましょう。

女　いいです。

虫眼鏡　え？

女　過去は、いいです。思い出したくない。

電話番　大丈夫です。朝食のメニューとか、せいぜいそんなもんですから。

虫眼鏡　また余計なことを。

女　ああ。朝食くらいなら。

虫眼鏡、女の顔を覗き込む。

電話番、男から電話を奪い取り、電話をかける。

男は電話を奪い返そうとするが、電話番は避ける。

虫眼鏡　456.789.0021.33

電話番　456.789.0021.33…はいはい。（メモを取る）

男、電話番から電話を奪う。電話をかけようとするが、繋がらない。

電話番　はい。（メモを虫眼鏡に手渡す）

男、何度かデタラメに電話をかけるが繋がらず、諦めて電話を放り出し、去る。

電話番　（男に）乱暴な人。

女　どうかされましたか。

電話番　いえ、お気になさらず。

虫眼鏡　ええと、なんだこれ。「おふろばの、おかあさん」？

女　（怯えているような、怒っているような）

白蛇　朝食じゃなさそうだな。

女　もういいです。思い出したくないって言ったのに。

女、出ていく。

白蛇　また怒らせたじゃないか。

虫眼鏡　怒ったというか、様子がおかしくなかったか。

電話番　でも今度もお金はもらえたっす。

白蛇　良心の呵責。

電話番　五千円二枚で、たしか…いちまんえん。

虫眼鏡　この調子で稼げるなら、救助まで食いつなげそうだな。

白蛇　ほとんど詐欺じゃないか。

女が戻ってくる。

虫眼鏡　あ。さっきの。

白蛇　（厳かに）どうなされた。

虫眼鏡　またノッてる。

電話番　やっぱり占って欲しいとか？

虫眼鏡　余計なこと言うなって。

女　はい。占ってもらえますか。私の未来。

虫眼鏡　え。あ、はい。もちろん。

一同、占いの位置に戻る。電話番は出ていく。

虫眼鏡　では、あらためて。ええ…見たところあなた、ずいぶん難しい選択を迫られている
ようだ。

女　やっぱりわかるんですね。

虫眼鏡　もちろん。

女　では、そのことについてなんですけど…

虫眼鏡　お待ち下さい。もちろんあなたのお悩みはわかっています。わかっていますが、ご自分の口からご相談いただくことに意味があるのです。

女　そうですか。じゃあ…。あの、私、恋人に結婚しようと言われたんです。彼は「近い将来きみとの子どもが欲しい」と言いました。でも私、母親になる自信がなくて。

虫眼鏡　結婚を迷われているんですね。

女　いいえ。結婚は、したいんです。子どもも、欲しいと思ってます。

虫眼鏡　なるほどそういう相だ。

女　だから、占ってほしいんです。私が、まともな母親になれるかどうか。

虫眼鏡　まともな、母親。

女　そうです。

白蛇　まとも、というと、どのような。

女　だから、普通の、お母さんです。

虫眼鏡　なるほど。ふーむ…

白蛇　しばし、待たれよ。

虫眼鏡と白蛇、少し離れた場所に移動する。

虫眼鏡　（小声で）弱ったな。そもそもこの星の「普通」がわからない。

白蛇　わかったところでどうしようもないです。

電話番が出てくる。

電話番　隊長――！電話、プラン変わったっす！

虫眼鏡　なんだ。

電話番　だから、地球人の過去データ照会のプラン、上のやつに変わってました！

白蛇　だから何だって言うんだよ。

電話番　私だけ暇だから、あの人の識別番号でもう1回照会してみたんすよ。そしたらめちゃめちゃ細かい情報提供してくれました。会社が私たちのために、プラン変えてくれたんすね。

虫眼鏡　本当か！

白蛇　私たちのためを思うなら、なんで助けを寄越さないのかね。

虫眼鏡　それは今置いておいて、ほら、客の過去が詳しく分かれば、占いの足しになるんじゃないか

電話番　ですよね。でもちょっと口頭で伝えるには長いんで、再現やりますね。隊長も手伝ってください。

電話番、虫眼鏡に作業着を着せる。

電話番　あの人の、父親役です。

虫眼鏡　おう。

虫眼鏡は一旦出ていく。

■女の過去（再現）

舞台は女の実家になっている。

女は過去の女になり、エプロンをつけて床を拭き始める。

女が拭いているのは、部屋に飛び散った血痕。

父役の虫眼鏡が入ってくる。

電話番と白蛇は離れて見ている。

父（虫眼鏡）ただいまー。

女　（無言で床を拭く）

父　え…血…？血だよなこれ。こんなに…。みわ、何してる。どうした？何があった。

女　（うわの空で）ああ、父さん…。おかえり。

父、血痕を辿り出ていく。

父の声　わ、母さん！母さん！！しっかりしろ！

父は電話をかけに戻ってくる。

父　…もしもし、はい、救急です。妻が、風呂場で、手首を切って…救急車、お願いします。え？あ、はい、止血…あ…今は一応、止まってる、みたいです…えぇ…お願いします。

父、電話を切る。

父　今、救急車呼んだから。お前どうして父さんに連絡くれなかったんだ。混乱し

たのかもしれないけど、こういうときはまず救急車。小さい子でもわかることだろ。

女　（拭きながら）ああ…そっか。そうだよね。ごめんなさい。

父　しっかりしてくれよ。

インターホンの音。

父　来た。みわ、父さん一緒に病院行くから。タイチのお迎え、頼む。

父、出ていく。女はまだ床を拭いている。

女　そうか、タイチ…。お迎えの前に、お風呂場もきれいにしておかなくちゃ。

女、日記を書き始める。

電話番　このとき、彼女、13歳です。

白蛇　キツイな。

女の家の電話が鳴る。女が受話器をとる。

女　はい。あ、お父さん。…うん。そっか、よかった。

女、電話を切る。再び日記を書き始める。

虫眼鏡が出てくる。

虫眼鏡　なんだよこの重い再現ドラマ。子どもに血痕拭かせてんじゃねえよ私！しっかりしてくれよじゃねえよ私！

電話番　仕方ないっす。再現なんで。

虫眼鏡　ああごめん、頭に血がのぼっちゃって。

白蛇　「お風呂場の、おかあさん」か。

電話番　まだありますよ。過去のデータ。

電話番、虫眼鏡の作業着を脱がせ、白衣を着せようとする。

虫眼鏡　なんだこれ。

電話番　白衣ですよ、ドクター。

虫眼鏡　やだよ、電話番、キミが適任だ。

電話番　えー。

虫眼鏡　ほら、それ着て、座って。

電話番　えー…

電話番はしぶしぶ白衣を着る。

電話番が座ると、診察室。女、日記を閉じて診察室へ。

医者（電話番）　今日は、お父さん、いないの。

女　はい。仕事で。母も、連れてくるのは難しくて。

医者　（女のほうを見ずに）そう…。困るんだよね大人がいないと。

女　ごめんなさい。

医者　状態は？あれから変わらないの。

女　同じです。ずっと。

医者　じゃあ前回と同じ薬だしておくから。

女　はい。

医者　薬、ちゃんと飲んでるの。

女　飲んでる、と思います…

医者　はっきりしないなぁ。ちゃんと確認してる？

女　毎日は見てなくて。ごめんなさい。

医者　あのね、お母さんの病気は、家族の理解と支援が必要なのよ。よく話を聞いてあげて、いたわるんだよ。お父さんにも伝えておいて。

女　わかりました。

医者　はい、じゃあまた。次はお母さん連れてきて。

女　はい…

女、診察室を出る。日記を書き始める。

電話番　（白衣を脱いで）なんすかこの嫌な役！

虫眼鏡　仕方ない。再現だから。

白蛇　しかし何なんですかこの星。それとも、地域の問題ですか。なんかムカついてきた。

虫眼鏡　あの人、「普通の母親」って言ったよな。普通って、病気じゃないってことか？

電話番　まあ、そうでしょうね。まだデータありますけど、どうします？

白蛇　しんどいけど、知りたいような気もする。

電話番　野次馬根性っすね。

白蛇　そんな不謹慎なものじゃなくて。なんていうか…わからんけど。

虫眼鏡　どうせまた嫌な役やらされるんだ。

電話番　大丈夫。次はあの人、1人です。

女、日記を閉じる。座り込んで、古い携帯電話を取り出す。どこかに電話をかける。

女　もしもし、「よりそい電話相談」はこの番号であってますか？あってますか。話、聞いてもらえますか。…ありがとうございます。私？13歳です。携帯電話を買ってもらって、初めてかけました。

…ええと、お母さんの具合が悪くて、つらいんです。はい。私が11歳のとき、弟が生まれました。弟を産んでから、お母さん、具合が悪いんです。私が家にいるときはずっと布団にこもって泣いています。でも学校から帰ってくるとリビングがものすごく散らかっているんです。だから、誰もいないときは活動しているんだと思います。私は散らかった食べ物やゴミを片付けて、夕方弟を保育園に迎えに行って、ごはんを作るんですけど、…え、お父さん？お父さんは、仕事で夜遅いから…。はい。そうです。…夜は私、一旦寝るんですけど、夜中

になるとたいていお母さんが起こしにきます。子どものころの辛かったことと
か、死にたいとか、人の悪口とか、たくさん喋ります。私はただ頷いて、お母
さんの話が終わるのを待つんです。学校は好きだけど、毎日眠くて、ボーッと
して、友達もだんだん離れていきました。休んで眠りたくても、日中は家をぐ
ちゃぐちゃにしているお母さんがいると思うとなんだか怖くて、学校を休んで
も休める場所がないから、私、すこし、疲れています。
でもこんなふうに親のことを嫌だと思うなんてひどいですよね。私がもっと優
しい人間だったら、お母さんだって、あんなことにならないで済んだのかもし
れません。相談員さん、どうしたらいいですか。
…はい。…はい。そうですね。…ありがとうございます。メモ…あります。は
い。わかりました。…ありがとうございました。

女、電話を切る。

女　また、やることが増えちゃったなあ。

女は日記を書く。

虫眼鏡　さっきから何か書いてるな。

電話番　あれは多分「日記」ですね。個人的な日々の出来事などを記録する地球人の風習です。

女、日記を書き終えてエプロンを脱ぎ、現実に戻る。

女　あの。

電話番　はい？

女　いつまで待てばいいですか。

虫眼鏡　ああ申し訳ない。占いに戻りましょう。

一同、座る。白蛇は女を見つめている。

女　それで、私は、大丈夫でしょうか。

虫眼鏡　それはつまり、「まともな母親」になれるかどうか、という先程の質問ですね。

女　はい。

虫眼鏡　まともな母親というのは、心身ともに健康な、という意味ですね。

女　そうです。

虫眼鏡　うーーーーむ。見えます。あなたの相は…

女　相は。

虫眼鏡　大丈夫です。

女　大丈夫。

虫眼鏡　結婚してください。子どもを産むといい。あなたは死ぬまで健康だ。精神も肉体も。

女　私の未来、見えるんですね。

水晶が突然出てくる。

水晶　見えます。あなたは、パートナーと、お子さんと手を繋いで笑っています。

電話番　（小声で）適当なこと言ってる。

女　良かった…。ありがとうございます。

女、立ち上がって去ろうとする。

白蛇　待って。忘れ物です。（日記帳を渡す）

女　ああ…どうも。

白蛇　我々の星では。

女　我々の星？

電話番　ああ、ほら、ええと、私たち、宇宙からのパワーを受けて、あなたのミライを、ナニするワケです。

女　そうなんですか。

電話番　そうなんです。

白蛇　我々の星では、その、そういった重大な悩みを抱えている場合、通常はパートナーと共有するものです。

電話番　まあそうっすね。

女　…話さなくても上手くいくなら、それでいいですよね。

白蛇　だけど。あなたは、行き場がない気持ちに蓋をしているんじゃないですか。

女　…ありがとうございました。

女、出ていく。

虫眼鏡　（白蛇に）全く。余計なことばっかり。水晶はファインプレーだったな。

水晶　でしょう？見えてるから。私。

白蛇　でも、あの人。

虫眼鏡　我々の目的はあくまで地球調査だ。深入りしないのが正解だろう。

白蛇　しかしですね。

電話番　まあ、言いたいことはわかります。

虫眼鏡　深入りしたところで、案外すぐ救助がくるかもしれない。そしたらお前だって帰るだろ。責任持てないんだよ。

白蛇　まあ、そりゃそうですけど。

電話番　それにお金、もらえたっす。

白蛇　お前はいいな、お気楽で。

水晶　見えます…！

言いながら水晶は出ていく。

電話番　あっちもたいがいですけどね。

■男の相談

男、入ってくる。

電話番　あ。さっきの乱暴な人。

男　いや、さっきはその、すみません。

虫眼鏡　こんどは何です。

電話番　まだ聞き足りないっすか、過去のデータ。

男　今度は、未来を。教えてほしいんです。わかるんですよね？

虫眼鏡　まあ、わかりますな。

白蛇　（男に）それで、具体的には何を。

男　はい、恋人が、僕との結婚を受け入れてくれるかどうか、不安で…

電話番　結婚結婚。流行ってんすかね。

白蛇　そもそも受け入れるかどうか、というのが解せん。双方同意のもとに行われる契約ではないのか。

男　それはまあそうなんですけど、なんていうか…僕の方から「結婚しない？」って言ったんです。「近い将来、きみとの子どもがほしい」って。そうしたら彼女「考えさせて」と言ったきり黙り込んでしまいました。それからずっと何となくうわの空っていうか、物思いに沈むようになってしまって、プロポーズしてふられるのかぁって思ったらちょっとしんどくなってきてですね。

虫眼鏡　なるほど。

電話番　なんか、さっきの人の話と似てますね。

虫眼鏡　もしかして同じ話なんじゃないか。

男　　え？

虫眼鏡　いえ。こちらの話です。

男　　さっきその電話、「2023年9月1日、プロポーズした」って言ったんです。そのときの自分が何か下手うったんじゃないかと思って、ずっと聞いてみたんですけど、そのうち急に僕の子どもの頃の話が聞こえてくるようになって…子どものころも色々上手く行ってなかったんで、何かヒントがあったらと聞き入ってしまいました。

白蛇　　あんたも、幼少期に苦労しているクチか。

電話番　さっきの人とカップルなら、ほっといてよさそうっすけどね。

男　　え？

虫眼鏡　いえ、これも、こちらの話。あなたの話はよくわかりました。ふむ…御顔をよく見せてください…875.2663.523ー

電話番　はーい。（電話をかける）875.2663.523…

男、急に立ち上がる。再現が始まる。

電話番　再現はじまりましたー。

白蛇　　なんか、機能変わってないか、それ。

電話番　日々進化してるんですよ。

女が入ってくる。

男　あの…そろそろ、結婚しない？

女　え。

男　遠くない将来、きみとの子どもも欲しいと思ってる。

女　待って。急にそんな。

男　急かな。もう2年付き合ってるけど。

女　…ちょっと、考えさせて。

男　…わかった。

沈黙。

男　あのさ、今日これから、ちょっといいホテルのちょっといいレストラン予約してるんだけど。

沈黙。

女　そこ、キャンセル料かかる？

男　かからない。

女　じゃあ、ごめん。

男　…電話、してくる。

女　本当、ごめんね。私、先に帰ってる。

男　おう…

女、去る。

男　（絶望して）終わった。

虫眼鏡　間違いないな。

電話番　間違いないっす。

白蛇　急に都合のいい過去のデータが引き出せるようになったな。

電話番　金のチカラっすね。しかしなんでちょっといいレストラン行く前にプロポーズしちゃったんすかね。

突然、電話が鳴る。

電話番　（受話器を耳に当て）はいっ。え、あ、はい。りょーかいっす。（虫眼鏡、白蛇に）帰れるかも、しれないっす。

宇宙人三人、相談を始める。

電話番　水晶センパイも、いい加減こっち来てくださいよ。

水晶が出てくる。

水晶　あっち行ってろって言ったり来いって言ったり忙しいやつね。

相談に水晶も加わる。

男、現実に戻る。再び占いのイスに座る。

男　あの、どうしたんです。

虫眼鏡　いやいや、失礼。ふむ、あなた、結婚は諦めたほうがいい。

白蛇・男　え？

水晶　そういう相が出ている。

男　そうですか、やっぱり…。

虫眼鏡　気を落とすことはありません。運命を変える方法がひとつ、あります。

男　どんな方法ですか。

虫眼鏡　恋人の日記を、私のところに持ってくるのです。

男　日記、ですか。書いてないと思いますけど。

虫眼鏡　いえ、持っていました。

男　え？

虫眼鏡　なんでもありません。探してみてください。きっとあります。

男　はあ…じゃあ、やってみます。

男、ふらふらと占いブースから離れ、舞台の端に座る。

電話番　ありあーっしたぁっ！

虫眼鏡　だからそういう威勢のいい挨拶はやめろ。

白蛇　隊長、いいんですか。

虫眼鏡　なにが。

白蛇　いくら本部から「地球人の直筆文書を調査資料として入手しろ」って言われた

からって、部外者をあんなふうに利用するのはどうかと。

虫眼鏡　調査だ。

白蛇　調査。

虫眼鏡　地球における、すれ違う男女の生態調査。

電話番　隊長は地球に来る前、韓国ドラマ見まくってたっす。水晶センパイも。

白蛇　好奇心かよ…。

虫眼鏡　ヒト難あって、

水晶　めっちゃうまくいくかもよ。

電話番　この二人、脳みそが恋愛ドラマになってます。

白蛇　水晶はともかく、隊長のそういうところ嫌いです。

虫眼鏡　だったら確認してこいよ。地球人男女の生態調査任務はお前に任せた。

白蛇　適当なことばっかり言いやがって。

虫眼鏡　我々はこのオカネを持って、駅前のスーパー「ほりぶん」で別の調査だ。

（電話番と水晶に）行くぞ。

水晶　えー。私も男女の生態調査がいいー。

虫眼鏡　いいから。

虫眼鏡と電話番、水晶が出ていく。

■外

白蛇、男に近づいていく。男はぼんやり座っている。

白蛇　（咳払い）

男　あ…さっきの。

白蛇　さっきはその、申し訳ない。

男　いいんです。あなたに言うのもなんですけど、所詮占いですし。

白蛇　しかしあなたは傷ついておられる。

男　傷つくなって言う方が無理ですよ。

白蛇　デタラメだと言ったら。

男　え。デタラメ。

白蛇　そう。口からでまかせ。

男　出任せねえ。だとしても、あながち間違ってもないかもしれないですよ。

白蛇　そうだろうか。

男　俺たち同棲してるんですけどね、考えてみたら、最近やっぱりおかしかったんですよ。ちょっと前は仕事も休んで昼間どっか行ってたみたいだったし…。この頃なんか、ぼーっとしてるんですよね。別れを切り出すタイミング考えてる

んでしょうね。

白蛇　思い違いじゃないか。

男　だったらいいですけどね。違うことで悩んでるなら、言ってくれると思いませんか。どうしたのって聞いても、彼女何にも応えてくれないんですよ。

白蛇　もっとしつこく聞いてみろ。

男　しつこく。

白蛇　結婚したいと思ったんだろ。

男　まあ。

女が通り掛かる。二人を見ている。

白蛇　だったら、結婚してください。

男　…わかりました。

女　え。

男　（女に気づいて）あ。

女　けんちゃん、え…そう…そっか…。

女、去る。

男　え、何？そっかって、何ですかね？

白蛇　さあ。

男　俺帰ります。

白蛇　そうするといい。

男、去る。虫眼鏡と電話番、水晶が出てくる。

電話番　いたいた。

白蛇　あれ。スーパーは。

水晶　それがなかったのよ、跡形も。

虫眼鏡　情報が古かったんじゃないか。

電話番　やっぱ先輩が頼りっす。

白蛇　呆れて何も言えん。

虫眼鏡　首尾はどうだ。

白蛇　いやーな感じがします。

電話番　面白くなってきたってことっすかね。

虫眼鏡　そうか。楽しそうだな。

白蛇　どこが。

虫眼鏡　作戦変更。スーパーはやめだ。全員でこっちの任務を片付けるぞ。

白蛇　どうせ好奇心でしょ。

水晶　私はパス。地球にいるうちに占いを極めたいのよね。

電話番　あれ、男女の生態調査がいいって言ってませんでしたっけ。

水晶　オンナゴコロとアキノソラ？

虫眼鏡　…好きにしてくれ。

三人と水晶、別の方向に去る。

■男女の家

男と女が出てくる。場面は男女の家に変わる。女は新聞を読んでいる。

男　みわ。みーわ。

女　…。

男　なんで無視するのさ。みわー。

女　…。

男　何か誤解してるよ、絶対。さっきのあの人はなんていうかほら、占い師？みた

いな人で。

女　知ってる。

男　知ってる？

女　うん。

男　なんで。

女　私も、みてもらったから。

男　みてもらった？

女　変な占いだった。虫眼鏡で目の中覗き込む人と、どこかに電話してる人と、白いヘビを首にかけた人。あと…水晶？

男　なにを占ってもらったの。

女　それは…言えない。

男　どうして。

女　あのヘビの人、けんちゃんに結婚申し込んでたよね。

男　なわけないじゃん。なんだよそれ。

女　だって、結婚してくださいって。

男　それは、俺がみわとのこと諦めようとしてたからだよ。

女　けんちゃんが私のことを諦めたら、あの人と結婚するってこと？

男　違う。だから、あのヘビの人は、励ましてくれてたの。俺を。

女　なんで。

男　俺も、占ってもらったから。

女　なにを？

男　みわが、俺と結婚してくれるかどうか。

女　それで。

男　…。

女　それで、なんて言われたの。

男　…。

女　けんちゃん。

男　諦めろって。

女　なんでよ！

男　へ？

女　私には大丈夫って言ったのに。

男　はい？

女　結婚のこと、不安だから占ってほしいって言ったの。そしたらあの虫眼鏡、大丈夫だって。

男　不安だったのか。

女　あ…

男　なんだよー。ほっとしたー。こわかったー。

女　怖かった？

男　そりゃ怖いよ。2年付き合っていい感じで、この先もずっとこうしていられると思ってたのに、なんか、一緒にいても上の空って感じのこと多いし、俺地雷踏んじゃったのかと思った。

女　踏んだと言えば、踏んだのかな。

男　え？

女　怖いんだよ私。結婚とか、出産とか。

男　なにが怖いの。

女　全部。

男　もっと具体的に。

女　やだ。

男　なんでだよ…本当、わけわかんないよ。

女　ごめん。

男　ごめんじゃなくてさ、教えてよ。結婚が嫌なの？

女　わかんない。

男　わかんないじゃわかんないよ。ああもう！

女　いいから。結婚するから。

男　いやこの流れで無理じゃない？

女　めんどくさ。

男　あ、いまめんどくさって言った。

女　言ってない。

男　言った。

女　言ってない。

男　言った。

女　言った。

男　いっ…たよね。

女　うん。

男　めんどくさいんだ。

女　まあ。

気まずい沈黙。

男　そういえば、みわって日記書いてる？

女　書いてないよ。

男　本当？

女　本当だって。なんでそんなこと聞くの。

男　いや、何でもない。俺、ちょっとトイレ。

男、出ていく。

女は日記を出して、読み始める。戻ってくる男。

男　やっぱ持ってるじゃん。

女　けんちゃん。（日記を隠す）

男　なんで隠すの。

女　見せるようなものじゃないから。

男　見せて。

女　やだよ。どうしたの。けんちゃん変だよ。

男　結婚も嫌、理由も言ってくれない、日記も見せられない。占いも。もう別れたいってこと？

女　飛躍しすぎだよ。嫌とは言ってない。

男　言ってるようなもんじゃん。

女　日記は嫌だよ。

男　なんで。

女　…自作のポエムが書いてあるから！

男　おう…それは、そうか。

女　嘘だけど。

男　嘘かよ。

女　でも、嫌。愚痴ばっかりだよ。私の日記なんか。

男　じゃあ見ないから。貸して。

女　意味がわからない。ちょっと、やめて。

男と女、日記を取り合う。　そこに水晶以外の占い師三人がなだれ込んでくる。

男　うわ。あ、さっきの。

女　ちょっと、どこから入ってきたの。

虫眼鏡　揉めてるな。予想通り。

男　あんたが、日記を持ってこいって言うから。

女　え。

電話番　折り入ってお願いがあって来たっす。

女　どうやってここまで来たんですか。

電話番　それは…企業秘密っす。

女　え、怖。

男　警察呼びますよ。

虫眼鏡　まあまあ。（電話番に）お前、怪しいんだよ。

男　あんたもだよ。

虫眼鏡　（女に）あなた、日記帳持ってましたよね。

女　日記？

虫眼鏡　持ってるでしょう。私たちにくれないか。

女　え、何？

男　なんでそんなに日記に固執するんだ。

電話番　本部と連絡がとれたんすよ。私たち、帰れるかもしれないっす。

男　何言ってるんですか。

虫眼鏡　ああ、すみません。我々、実はいわゆる、地球外生命体でして。

女　やばいことしか言わない。

電話番　それで、地球調査に来たと思ったら置き去りにされちゃって。さっきやっと本部と連絡が取れたっす。で、帰還船を向かわせているから、調査実績として地球人の直筆文書を持ち帰るように、と。

女　この人もだ…

電話番　そう言わずに。日記帳、もらえませんか。

虫眼鏡　彼に依頼したんだが、どうもうまく行っていないようなので。こうして直々に
お願いにあがったのです。事は急を要する。

男　俺に言ったことと違うじゃないか。

虫眼鏡　それはほら、嘘も方便だ。

男　まじで何言ってんだよ。

女　…。

虫眼鏡　お願いします。実績なしじゃ面子が立たなくて。

女　いいですよ。

男　え？いや、やめようよ。こんな人たちに…

女　けんちゃんだって渡そうとしてたんでしょ。

男　それはまあ、そうだけど、

女　別に住所とか書いてないし。

男　そういうことじゃなくて。

女　いいよ。もう要らないから。もともと捨てようと思って、持っていたんです。

男　俺には隠してたのに。

女　知ってる人には見せたくないよ。わかるでしょ。

男　わかんないよ。

女、日記帳を出してくる。白蛇が受け取る。

白蛇　いいんですか。

虫眼鏡　（日記帳を白蛇から取り上げて）ご協力、感謝いたします。

電話番　感謝するっす。

白蛇　（男に）本当に、いいんですか。

男　え、俺？まあ…。もう占いも関係ないみたいだし、みわがいいなら。

白蛇　（女に）あれは、あなたの過去を共有するのに、便利なものだったのではないですか。

女　いいんです。

男　なんの話？

電話が鳴る。

女　電話。私のだ。

女、電話を取る。

女　…あ、タイチ。うん…そっか。わかった。じゃあ。

女、電話を切る。

女　お母さんが、亡くなった。

男　え。

女　先週から体調崩してて、入院してたの。

男　うそ。

女　言ってなくて、ごめん。

女、ハンガーラックからエプロンを取り、出ていく。

男　みわ。どこ行くの。みわ。

男は女を追いかけ、出ていく。

虫眼鏡が日記を開くと、また過去が始まる。

電話番　また再現ですか？疲れるんだよなあ見てるだけでも。

■過去　つづき

電話番が虫眼鏡に作業着を着せると、虫眼鏡は女の父に変わる。

水晶が出てきて、布団をかぶる。水晶は女の母になる。

父（虫眼鏡）みわー。そろそろ行くわ。

女　（エプロンをつけて出てくる）はーい。気を付けて。

父　母さんは。

女　さっき寝たとこ。

父　そうか。

女　だから、今のうちだよ。

父　みわ、本当に一緒に来なくていいのか。

女　…。

父　つらくないか。

女　大丈夫。前にも言ったじゃん。お母さんが心配だから。

父　ごめんな、みわ。母さんは、父さんじゃだめだった。

女　大丈夫だって。別居って言っても近所だし。タイチのお迎えも、大変な日は言って。

父　助かる。ありがとうな。

女　うん。

父　じゃあ、母さんのこと、頼む。

女　うん。

父、出ていく。

女　（ため息）今何時だろ。バイトの前にご飯作っとかなきゃ。

女はエプロンをとり、ジャケットを羽織る。就活中の学生になる。

女の母（水晶）は布団の中で泣いている。

女　おかあさん。

母　…。

女　私、就職決まったよ。

母　…。

女　ちょっと遠いから春から一人暮らしになるけど、お給料から少しは家に入れられるから。週末はちゃんと帰ってくるし。

母が布団から顔を出す。

母　捨てるんだ。

女　え…

母　あんたも、私を捨てるんだね。

女　なに言ってるの。

母　ここまで育てたのに。育てたのは私なのに。今の私がだめだから、あんたも、私のこと要らないんだね。

女　おかあさん。

母　（再び泣き出す）

女　大丈夫だよ。おかあさん。

母　…ごめんね、みわ、ごめんね…

女　…。

母　お母さん怖いの。出ていかないで。私一人にしないでよね。ねえ、あんたがいなくなったら私、どうしたらいいの。

女　週末には戻るよ。

母　嘘。嘘。嘘。ここにいるって言って。出ていかないで。

女　…。

母　（泣いている）

女　私、お母さんが喜んでくれるかと思っちゃった。

母　（独り言）結局私の気持ちなんて誰もわかってくれない。娘だけが頼りだと思ってたのに、捨てられるんだ。裏切られた…

女、母から離れる。

女　おかあさん。私、バイト行かなきゃ。

母　ひどい。でも仕方ないね…私がだめだから…死んだほうがいいんだ…

女　おかあさんは、死なないよ。

母　…。

女　いままでだって、そうだったでしょう。

女、出ていく。母は水晶に戻る。

虫眼鏡は日記を閉じる。

水晶　何やらせんのよこの私に。

白蛇　水晶、お前どこから出てきた。

水晶　私はどこにだって。…あれ？私水晶玉置いてきちゃった。水晶玉ちゃーん。

水晶、去る。

電話番　水晶センパイがやっても、再現きついっすね。

虫眼鏡　だろ？なんか俺、この日記読んでたらつらくなってきちゃった。

電話番　子どもの時間を犠牲にしちゃってますからね。私の青春わけてあげたいくらい。

白蛇　お前の青春なんか要らないだろ。

電話番　そうすか？楽しかったけどなー。恋愛して、失恋して、部活やって寝て。友達とコンビニの前でダラダラ喋って。

虫眼鏡　そういえば地球にもコンビニあったな。

電話番　無駄で大事な時間でした。

白蛇　誰も悪くなくても、苦しくなっちゃうことってあるんですね。

電話番　どうしたんすか。急に。

白蛇　いや。あの人もあの人の両親も、誰かが決定的に悪いわけじゃないのになあって。病気の母親と、不器用な父親と、小さい弟。彼女だって、自分の負担がだんだん重くなっても、助けを求めなきゃいけないってわからなかったんだ。家

の中のことったから、誰にも気が付かれなかった。

虫眼鏡　あの人、幸せになるといいなあ。

電話番　面白がってかき回そうとした人がなに言ってんですか。

男が現れる。

男　あ！すみません、みわ、見ませんでしたか。

虫眼鏡　（日記帳を隠して）いや…見てないけど。みわ？

電話番　ほら、彼女ですよ。

虫眼鏡　ああ。

白蛇　どうかしたんですか。

男　さっきの電話、聞いてましたよね？みわのお母さんが亡くなったって知らせだったみたいなんです。それでみわ、すぐ出て行っちゃったんで追いかけたんですけど、見失いました。

電話番　お母さんのところじゃないんですか。

男　俺知らないんです。みわのお母さんがどこにいたのか。

虫眼鏡　そりゃ仕方ないな。さて、荷造りしないとな。

虫眼鏡、去る。

男、疲れて座り込む。

白蛇　薄情だな。

電話番　そこが隊長のいいところっす。

白蛇　あ。

電話番　どうしました。

白蛇　電話。

電話番　電話？

白蛇　そうだ。電話しろ電話。あの人の識別番号で直近のデータ照会するんだ。居場所がわかるかもしれない。

男　またわけわかんないこと言ってる。

電話番　奇跡的に覚えてますよ、彼女の番号。

電話番、電話をかける。

電話番　456.789.0021.33

電話番、白蛇に電話を渡す。

■よりそい電話相談

電話番　繋がりました。過去っていうか、リアルタイムですね。

白蛇　ほら。（男に電話を渡す）

男、電話を耳に当てる。

女が出てくる。日記帳を持ち、電話をかけている。

女　もしもし、「よりそい電話相談」はこの番号であってますか？

男　え？

白蛇　話を合わせろ。

男　え、あ、はい。

白蛇と電話番は離れて二人を見守る。

女　あってますか。私の話、聞いてもらえますか。

男　（戸惑いつつも）もちろんです。

女　…ありがとうございます。あの、母が、亡くなりました。

男　それは、ご愁傷さまです。

女　ついさっき、です。

男　あの、電話…

女　いいんです。手続きは別の家族がやってます。

男　本当にいいの。

女　私、母が死んだら、誰かに聞いてほしいことがあったんです。言いますね。「ずっとあの人にいなくなってほしいと思ってた」。

男　え。

女　最悪な娘ですよね。

男　何か、あったんですか。

女　母は長い間、患っていました。父は忙しくて、子どものころから、私は両親に代わって家事や弟の世話をしていました。母の自殺未遂の後始末をしたことも、何度もあった。

男　そうでしたか…

女　夜は母に起こされて。明るくなるまで愚痴を聞かされていました。

男　…。

女　そんな生活が続いていくのが、私はすごく嫌だった。いつだったか母が死のう

として、父が救急車を呼んで、弟と二人きりの家で「助かったよ」と電話を受けたとき、私は「良かった」と言いました。でも本当は私「良かった」なんて思っていなかった。

男　…。

女　そのとき、私ははっきりと思いました。私を殺すのは私だと。それはきっと、優しくなれない私への罰だったんです。本音を言ってもいい人は、ちゃんと心から優しい人だけなんです。

男　そんなこと。

女　そんなこと、あります。あれからずいぶん、経ちました。父と弟は、私が高校生のときに出ていきました。父に「お前もおいで」と言われたけれど、私は母と暮らすことを選びました。そのとき父はほっとしたような顔をして、私は自分が、求められた回答をしたのだとわかりました。本心ではなかったけど。

男　つらかったね。

女　うん。つらかった。それに私、結局母を見捨ててしまった。

女、男に気が付く。別空間にいたはずの二人は、何故か同じ空間にいる。

女　けんちゃん…

男　いいよ。切っても。

女　ううん。話すから、聞いて。

男　うん。

女　それから、学校と家事とバイトと、母の話を聞くことが私の生活の全部になった。母が幼少期に受けた虐待の話。コンプレックス。父との離別。希死念慮。母には母の苦しみがあった。だけど、私は自分が、あの人のごみ箱なのだと思うようになった。苦しみという吐物を捨てる、裏路地のデカい水色のバケツ。

男　…。

女　ありがとう。

男　え？

女　黙って聴いてくれて。

男　いや…なにも言えなくて、ごめん。

女　私、前にもこういうところに電話したことがあったの。そのときに出た相談員さんは、私の話を聞いてこう言った。「いちばん辛いのはお母さまでしょうから、行政や医療の支援に繋がるように連絡先をお伝えしますね」。私は、私の中に溜まっていくこの苦しみの汚物は、じゃあ一体どこに捨てればいいんだと思った。母の苦しみがいちばんなら、じゃあ私の苦しみは何番目？精神科のお医者さんも「家族の理解と支援が必要です。よく話を聞いてあげてください」っ

て言った。どうして。病気から抜け出せない親を持ったら、人生全部を掛けて支えないといけないの。私は選んでない。あの人の家族になることを選んだりしていないのに。

男　みわ。

女　就職するとき、お母さんは「遠くに行かないで」って言った。「お前がいなくなったら私はどうしたらいいの」って。だけど私はその言葉に耐えられなくて、母を見捨てて家を出てしまった。さんざんいい子のふりをしておいて、私もひどいでしょう。…でも、母はもういない。支援しなきゃいけない人はもういないの。だから私、電話しました。しようと思っていました。何のアドバイスも要らないから、ただ聞いてもらえる状況になったら、もう一度電話しようって。

男　みわ。つらかったね。

女　…。

男　みわ。

女　…。

男　俺が、どのくらい君のちからになれるか、わからないけど。

女　ヤングケアラー。

男　え？

女　ヤングケアラーっていうんだよね。子ども時代の私みたいな人のこと。

男　ああ。聞いたことある。

女　私つい最近知ったの。新聞に書いてあった。大人がやるべきケアを担っている子どものことを指すんだって。病気の家族の看護、話相手になること、小さな兄弟の世話、家事全般。私のことだ、と思った。私を当事者にしてくれる言葉があったんだ、って。私はずっと、周辺のヒトだった。病気の母親のムスメ。小さな子の年の離れたアネ。周辺のヒトとして育った私は、そのまま大人になってしまった。私を当事者にしてくれる言葉をずっと待っていたのに。私、この言葉と出会う前に、ヤングでもケアラーでもなくなっちゃった。

男　うん。でも君は、そうだった。

女　帰ったらお帰り！と言ってくれるお母さんが欲しかった。私のことを子ども扱いするお父さんが欲しかった。私にはもう一生手に入らないものを、沢山の人が持っている。どうせ手に入らないものを追いかけ続けるなんてしたくないのに、頭から離れない。私は？あなたは？そんなお母さんと、お父さんになれるの？何もかも全て、本当は遺伝しているんじゃないかって思ったら、私は怖くてたまらない。

男　みわ。

女　ねえ、私はまともな母親になることができる？

男　みわ。それは、わからない。

女　そうでしょう。

男　だけど、大丈夫。

女　どうして。

男　みわは、ちゃんと考える人だから。

女　…。

男　ちゃんと優しい人だから。

女　考えたって、優しくたって、

男　それに、俺がいるから。疲れたら、全部投げ出していいから。

女　…あなたは？

男　かわりばんこに、なげだせばいい。

女　…。

男　俺も子どものころ、あんまり楽しくなかったんだよ。

女　そうなの？

男　父親と母親の仲が悪くて。物心ついてから、家族で食卓囲んで食事とかしたことないんだ。一人っ子だったから逃げ場もなくて。別れればいいのに、別れないんだよ。俺がいるからって。

女　そっか…。

男　中学くらいの頃が一番ひどくて、部活が終わって帰ると食卓に一人分の食事が

置いてある。母親が作ってくれてるんだけど、自分は家にいたくないから外に食べに行っちゃうんだよ。父親もそのうち帰ってくるんだけど、さっさと自分の部屋に籠るんだ。父も母も個室を持っていて、よくわかんないけど仲悪い人たちのルームシェア？みたいな。二人とも全然出てこないの。家に帰ってからが一番寂しかった。最近母に「あんたは反抗期がなかった」って言われたんだけど、反抗する相手が家にいなかったんだよなあ。言えなかったけど。

女　…ごめん。

男　なにが。

女　けんちゃんにだっていろんな経験があるのに、私ばっかりひどい目にあったみたいなこと言って。

男　いいんだよ。比べるものじゃないし。俺も確かに寂しかったし、頑張ったし、悪くない。みわも確かにつらかったし、頑張ったし、悪くない。

女　そうだね。ありがとう。

男　俺、あの占いの館で、過去の電話を聞いたんだ。

女　過去の電話？

男　自分の身に起きたこと、自分が言ったこと、言われたことをランダムに長いこと聞いていた。

女　何言ってるかわからない。

男　だよね。でも聞いたんだ。この電話だってそうだよ。もう過去じゃないのかもしれないけど。それで、子どものころの寂しかったこと、自分でも忘れていたようなたくさんの出来事を聞いた。あの頃、家族がうまくいっていないのはもしかして俺のせいなんじゃないかってずっと思っていたんだけど、大人になって過去を聞いたら、多分だけど、俺は悪くなかった。それに親たちだって悪かったわけじゃなくて、不器用だっただけだった。そう思えた。

女　…。

男　だからってわけじゃないけど、みわだってそうだよ。

女　どういうこと。

男　子どものころの親とのことは、みわが悪いわけじゃない。親だって悪いわけじゃないってこと。

女　ああ…そうだね。

男　話せてよかった。

女　私も。

男　次は直接話そうよ。

女　うん。

男、電話を白蛇に返す。

女　本当はこうも思っているんです。子どもの私は家族を選べなかったけど、今は彼と家族になるかどうかを、二人で選ぶことができるんだって。それにけんちゃんが言うように、本当は私のお母さんもお父さんも悪かったわけじゃない。今私が悩んでいる問題には、答えが沢山あるんだろうなって、心のどこかで、わかってはいるんです。

白蛇　（電話を耳に当て）そうですね。あなた次第だ。

女、白蛇、電話を切る。

男　ありがとうございました。

白蛇　いや。

電話番　先輩、なんかカッコいいっす。

白蛇　うるせえ。

電話番　しかし厳しい星というか、地域なんですかね。家庭内のことは自己責任っていうか。

白蛇　社会福祉の仕組みが弱いんだな。

電話番　報告書に書いておくっす。

男　ああ、そういう設定でしたね。

荷造りを終えた虫眼鏡と水晶が戻ってくる。

水晶は水晶玉を大事そうに抱えている。

虫眼鏡　行くぞ。迎えが来た。

電話番　さすが、はやいっすね。

白蛇　（二人に）ご協力、ありがとうございました。

強い光と共に四人が消える。

四人を見送りながら、男と女は近づいていく。

■ラスト

男と女が寄り添っている。女は日記帳を持っている。

女　行っちゃった…のかな。

男　絶対嘘だと思ったんだけどなー。自称地球外生命体。

女　（上空を指さし）あ。ほら、あれ。

男　うわ…あれ、あれだよな。UFO。

女　本当だったね。たぶん。

男　たぶん、ね。

女　誰も信じてくれないだろうね。

男　最後なんてもうよくわかんなくて説明できないよ。

女　本当だね。…あ、なんか燃えてない？あの人たちがさっきまでいた、あそこ。

男　うわ。本当だ。どうしよう、消さないと。

女　ちょっと待って。

男　え。

女　消す前に、一緒に燃やしたいものがあるから。

男　え、なんで。てか、いいの。

女　大丈夫だよ。燃え広がらなさそうだし。私決めてたの。お母さんがいなくなったら、あの電話相談に電話して、そのあと全部焼いちゃおうって。

男　全部焼いちゃおうって…なんかそれだけ聞くと怖いな。

女　そう？

女、持っていた日記帳を火にくべる。

男　本当に燃え広がらないかなぁ。

女　大丈夫だって。

男　もうなんか、いっか。なに燃やしたの。

女　日記。あのひとたちに渡した日記の、つづき。

男　いいの？

女　うん。

男　いや、ほら、ダイオキシンとか。そのカバー、ビニールじゃ…

女　馬鹿。

男　なんで。

炎を見つめる二人。

女　きれい。

男　あったかい。

女　落ち着く。

男　癒やされる。

女　しあわせ。

男　優しい。

女　ねえ。

男　なに。

女　こうやって、あったかい言葉だけ重ねて、生きていけるかな。

男　無理だよ。人生色々あるでしょう。

女　そうだね。

男　うん。

女　けんちゃんのそういうところ、好きだよ。

男　どういうところ。

女　ダイオキシンを気にしたり、火を見て一緒にきれいな言葉を並べたり、でもそれだけで生きていくのは無理だよって、ムードぶち壊してちゃんと言うところ。

男　ぶち壊したかなあ。

女　ぶち壊しだよ。

男　きれいごとだけじゃ無理だけど、俺はそれでいいと思ってるからね。

女　そうだね。

男　人生色々の、色々を、一緒に生きようよ。

女　うん。

女　今日このあと父さんとタイチのところに行ってくる。葬儀の準備とか、任せきりにしちゃってるし。

男　俺も行くよ。

女　あ、そうか。

男　おいて行かないでよ。

女　そうだね。

男　お父さんにも挨拶させて。

女　うん。

男　お母さんとお父さんのこと、恨んでる？

女　どうかなあ。本当はいい思い出もたくさんあったんだよ。

男　そうなんだ。

女　日記には嫌なことばっかり書いて、何ていうか、引き受けてもらってた。

男　そっか。

女　燃やしちゃうなんて可哀想だったかな。

男　いいよ。きれいだし。

女　…それとも、もっと早く燃やすべきだったのかな。

男　どうして。

女　いい年してこんなことずっと引きずってたりして。

男　いいんだよ。人生のどんなできごとも全部、今のみわにつながってることなんだ。

女　…ありがとう。

火が燃え尽きる。

女　きれい。

男　きたない。

女　あたたかい。

男　つめたい。

女　落ち着く。

男　ざわつく。

女　癒やされる。

男　傷つく。

女　しあわせ。

男　憎らしい。

女　優しい。

男　無関心。

女　いいことと、悪いことと、その間のぜんぶ。

男　きっと大丈夫。

女　きっと、大丈夫。

■エピローグ

男が日記を読んでいる。女の日記。

男　「けんちゃんが、お母さんとお父さんのこと、恨んでる？と聞いたとき、私はどうかなぁと言ったけれど、本当は」…途切れてる。

女が出てくる。

女　読んでる。

男　あ、ごめん。

女　いいよ。

男　最後のページ、なんて書こうとしたの。

女　え？

男　ほら、ここの続き。

女　ああ。なんで。

男　気になるよ。

間。

女　本当はね、苦しいくらい、愛していたんだなぁって。

男　ああ。

女　…母さんが、次は幸福に、生まれてきますようにって。

男　幸福に。

女　うん。幸福に。

男　そうだな。

（終わり）